



豊橋市美術博物館友の会だより

-2011年-冬号 **Vol.81**
FU風伯HAKU
Winter 2011

PLAY THE GLASS — ガラスアートの新たな可能性

ガラス造形作家 増田洋美さん

新しいテーマは『アートに力はあるのか』。

未来が希望と同義語だった時代は終わってしまった。これからの時代を生きるエネルギーに音楽や美術はなりうるのだろうか。余った時間つぶしの高尚なお勉強なのか。魂が求める切実な命の水であり糧なのか。

ガラス造形作家の増田洋美さんに豊橋市美術博物館に来ていただき、この疑問に答えていただいた。

Q:増田さんの作品は各国のさまざまな旧跡で展示されていますが、それぞれの国での受け止められ方や反応の違いはありましたか？

増田:ジャーナリストやアーティストはそれなりに世界共通ですね。ガラスですから全体的にカラフルできれいなアートです。

イタリアではおばあちゃんも新しいアートを探して、「現代アートよ。新し



増田洋美さん

いものよ」って作品を買うんです。インドネシアでは新聞に大きく取り上げられましたけど、一般の方はちょっと首を傾げてましたかね。

S:最初に主催する側からここで展示してほしいというオーダーがあるんですか？ 会場に行かれてまず何を考えるのでしょうか？

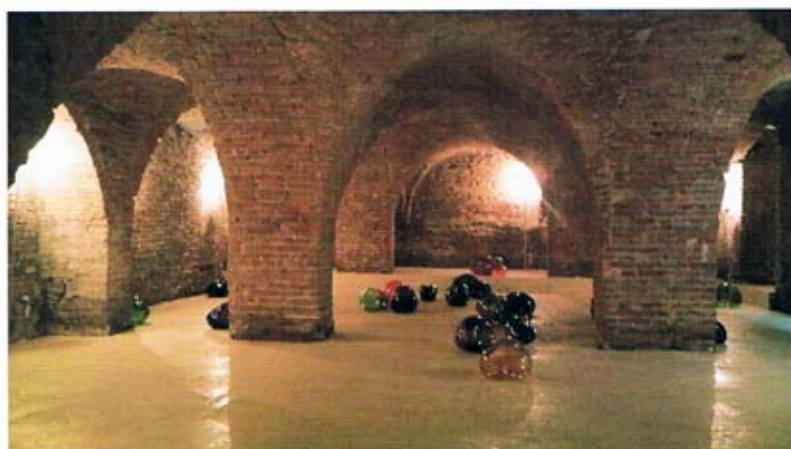
増田:展示のオーダーが入ります。インスタレーションですから、この場所では何個必要な、この作品数で間に合うかなとか考えます。スケール感を出すために、ガラスと同じように見えるカラフルなビニールシートを700mも使ったこともあります。作品をギュッと凝縮してそこに置くとか、その都度いろいろ考えますね。

Q:古い建物を展示スペースとする場合、ガラスという異なる要素をそこに置くことによって、見慣れた場所が浮き立ってくる感覚がありますね。

増田:白い空間を背景にインスタレーションをする場合は、それだけでアピールしますが、古代遺跡に持って行きますと、場とガラスとの対話がないとダメですね。でも意外と合っちゃうんですね(笑)。

F:とても異質なものはずなのに、ぴったりと収まっていますよね。両方の美しさが引き出されている気がします。

増田:ベネチア、ムラノ島でのガラス制作のきっかけは、2000年にベネチアに行った時、工房で出会った若い男子(実は工房の娘婿)が、「うちで作りませんか？」って。ベネチアでガラスを作れるなんてすごいと思いました。半信半疑で日本に帰ったら、電話がかかってきて「お待ちしてます」と言うので、何も考えずに行きました。この時に制作した作品が「ベネチアの風」で250個作っちゃったんです。



特集「アートに力はあるのか」その1

サンマルコで板ガラスの作品を展示した折、1週間通ってくれたイタリア人が、「これは北斎の浪裏だ」と言うんです。私は日本を感じてもらえるなんて全く思っていませんでした。

O: ジャポニズムを感じさせたんですね。始めから集合させて展示するという意識はおありですか？

増田: アピールするためのポイントはスケールの大きさと数です。制作では、工房を借り切った時間勝負になりますから、一番アピールできてたくさん作れる数の限定をして大きさが決まったんです。とにかく見る人に脅しをかける(笑)。とにかくビックリしろって感じですよ。



O: それスケール感に繋がっているわけですね。

増田: 私の原点はアンティークのガラスの器でした。ガラスの現代アートは40~50年前、アメリカで起こったんです。その流れが日本に入ってきた頃、主人に連れて行かれてガラスに出会っちゃったんですよ。ガラスをいじっていると気持ち良くて、毎晩夢に見るほどガ

ラスに取りつかれました。いろいろな技法の中でも特に吹きガラスが大好きになったんです。

S: ガラスの作品が出来上がった瞬間と展示をし終わった瞬間では、どちらにより出来上がった満足感があるんですか？

増田: 満足感はほとんどないです。展示にしても、100個の関係がいちいち気になるけど全部は直せない。不満だけれども終わるしかないって。

私は工芸科を出て、「さすがデザイン出だね」とデザイナーの先輩からほめられたんですけど、ショックを受けました。あの配置は確かにデザインですけど、「あ、デザインか〜」って。でもアートの原点は見世物だというポリシーの方が「デザインで何が悪い？皆が面白がっていいと言えばそれでいいんだ。増田さんのも見世物だよ。そうだろう」と。

O: 「PLAY THE GLASS」の「PLAY」は「遊ぶ」ではなくて音楽から来ているんですか？ ガラスを吹くスタイルが笛を吹いているようにも見えますけど。

増田: ガラスを吹くにはリズムをとらなきゃならないので、「音楽」と「遊ぶ」の両方ですね。

S: ガラスを1000個作ったり、広い場所にインсталレーションしていくエネルギーはどこから来ているんですか？

増田: 冬も軽井沢に住んでいますが、田舎暮らしがいいトレーニングになっているからでしょうか。毎年3~4カ月は汗びっしょりかきながら地面に腰をおろして草むしりをします。これからの季節は一日1時間枯れ枝を拾って歩きます。それをのこぎりで切って、夜は薪ストーブ。



座談会風景

S: これから先の展開を教えてください。

増田:板ガラスの作品はライフワークです。パーツを重ね、接着して作品を仕上げます。接着の角度を決めるのに、高い所から見て、切ってまた置いてみる。作るのが大変な作業ですが、6~700個あるパーツを死ぬまでに全部接着したいんです。



毎日道に迷うほど展示場所が辺鄙なうえ、フランスで1万人も亡くなった熱波の6月にも関わらず、いっぱい見に来てくれて、みんな会場に入ると「わあ〜、気持ちがいい〜」ってガラスに触るんです。

O:増田さんの作品は柔らかい感じて優しいので癒しの力がありますから、触りたくなるんですよ。豊橋で全市を挙げて大規模に現代アートを紹介するのは初めてのことです。増田さんの作品でガラスの概念や価値観が変わるんじゃないでしょうか。楽しみにしております。

O:これからインスタレーションをやりたい場所がありますか？

増田:砂漠と氷の上ですね。昨年、モロッコのサハラ砂漠の入り口まで行ったんですが、足跡がついて砂漠はダメでした。

インドネシアの海岸では砂浜でやったので、今度は氷。誰かが北極ですねって言ったけど北海道ぐらいでいいです。



O:氷とガラスは同質のもので面白いですよね。どういう風に反応するか観たいですね。

S:3月の大震災以後、各地で展覧会やコンサートがキャンセルになるなど、自粛ムードがありました。この時代に、美術や音楽の価値をどんな風にお考えですか？

増田:人間生きている以上、ギリギリの時でも歌を歌ったりするじゃないですか。それと同じでアーティストの存在価値もこういう時の方があがるような気がします。

2003年のヴェネツィアビエンナーレでは、私自身が

増田:日本では焼き物が中心で、なかなかガラスには目がいけない。手作りですから確かに値段は高いんですが、ガラスで食べていけるのは藤田喬平さんぐらいなんです。ガラスに興味を持っていただけるよう、若い作家たちのためにも役に立てたらと思っています。

来年1月からの「現代美術展inとよはし」の資料に心が動き出す写真を見つけた。それが増田洋美さんの「PLAY THE GLASS」と題する作品であった。見るだけでない、眺めるだけでない、触りたくなり、様々に思いを馳せ、心が動き出す、見たことのない作品だった。お話も生き生きと楽しく幸せな時間が過ぎた。

(風伯編集部)

増田洋美 (ますだひろみ)

1942年、神奈川県生まれ。69年、東京藝術大学大学院鍍金科修了。2005年、「第51回ヴェネツィア・ビエンナーレ」公式個人参加。「SOUL展」招待出品(モダンアート美術館企画/ブルージュ・ベルギー)。「ジャワ移動個展の旅」遺跡インスタレーション(写真集刊行)。2010年、「増田洋美 PLAY THE GLASS展」(新潟市新津美術館)

トケコマン? トケコミン! 「現代美術展 in とよはし」を開催

大野俊治(キュレーター/豊橋市美術博物館主任学芸員)



日常的で平凡な都市空間に非日常的で非凡な要素を一つ投げ入れると大きく動き出すという考え方があります。

現代アートをツールとして都市の活性化を図る試みが2001年に横浜で始まりました。「YOKOHAMA トリエンナーレ」です。この成

功を契機として、この種のイベントが各地で行われるようになり、2010年には「金沢・世界工芸トリエンナーレ」や「あいちトリエンナーレ」が相次いで開催されるなど、中部圏においてもアートが都市社会の構造や産業と結びついて様々な効果を得られることが認識されるようになりました。

もともとこれは過疎地域である山村に都会の人々を呼び込もうと2000年に開催され、話題を集めた「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」が下敷きになっているように思われます。日本の原風景を想わせる田舎で、茅葺屋根の廃屋や田んぼの中に現代アートを置き対比させることによって、新旧それぞれの良さを際立たせ相乗的な魅力を引き出していました。コンセプトが明確で、環境や作品のクオリティなど条件さえそろえば、知名度の低い片田舎でも日本だけでなく世界各国から高い関心を集め、人々が大挙して訪れることが実証されたのです。

しかし、大都会で同じことをやろうとしても、巨大なビル群の中に埋没してしまい、その魅力は半減してしまいます。作品の規模や色彩や素材も含め、慎重に検討して都市の中でも負けない現代アートを探らなければなりません。当然、大都会でなくても都市の規模や性格、予算や内容、会場の空間や付帯条件によってキュレーションも変わってきます。

ご案内のとおり、あいちトリエンナーレ地域展開事業(あいちアートプログラム)のメイン事業として「現代美術展 in とよはし」が、いよいよ2012年の新春を飾り、最長で1月17日から2月19日まで開催されることになりました。

幸い(?)豊橋は都市と田舎が同居する中核市なので、乱立する高層ビルもなく、象徴的(歴史的・構造的)な建造物や緑豊かな公園が点在するほか、市内をゆったりと走る路面電車(市電)と渥美半島へとつながる足として重要な役割を担うローカル電車(渥美線)の姿が街の景観に溶け込み、独特な風情を醸し出しています。

これら特徴的なスポットを会場や導線に登用しながら現代アートをまちなかに置こうと考え、「コラボレーション」をキーワードにクリエイティブな活動を展開している10組・11名のアーティストに参加を呼び掛けました。

カテゴリーやジャンルを超え、異なる環境や空間とコラボするアートの世界。

豊橋のまちなかをアートで飾ります。

街と人と作品が一体となって、溶けあいながら響きあう。

合言葉は——トケコマン? トケコミン!

あなたも是非、体感してみてください。アートのパワーで、豊橋の街が変わるかもしれません。



二川宿本陣資料館の展覧会

新春の遊び展

開催中～平成24年1月15日[日]

休館日＝月曜日、12/29～1/1(ただし、1/2(月・祝)、1/9(月・祝)は開館、1/10(火)は休館)

かつて唱歌にも歌われた子どもたちに人気の正月遊びといえば、凧揚げ、独楽回し、鞠つき、羽根つき。さらにカルタとりや双六も人気がありました。

ところが最近では、外で凧揚げや独楽回しができる場所が少なくなり、また、各種ゲームの普及などから子どもたちが外であまり遊ばなくなり、これら正月の風物詩を目にする機会も少なくなりました。

この展覧会では、「新春の遊び展」と題して、松岡コレクションのカルタ、双六など、大口コレクション(豊橋市美術博物館)の羽子板、鞠、小嶋寿女コレクション(豊橋市美術博物館)の凧、中村光雄コレクション(豊橋市美術博物館)の独楽を展示しています。

また、今回は9月17日に動植物公園でゾウの赤ちゃんが誕生したことを記念し、ゾウに関するカルタ、双六なども展示しています。



中村光雄コレクションの独楽

美術博物館の展覧会

収蔵品展 平川敏夫と大森運夫～それぞれの道程

～樹々の生命を見つめた平川、人間の生き様を追い続けた大森～

平成24年2月11日[土]～3月18日[日] 2階全展示室



奥飛騨寒日 / 1997 (平成9年) 189.5 × 385.0 cm



冬の夜神楽 / 1974 (昭和49年) 169.4 × 369.2cm

平川敏夫(1924-2006)と大森運夫(1917-)は、ともに独学で日本画をはじめ、創画会を拠点に活動を展開した郷土を代表する日本画家です。樹木の生命力に魅せられた平川は、燃え立つような樹林を描いて注目を集め、やがて深山幽谷を主題に水墨による独自の様式を築きました。また、大森は一貫して人間の生き様を描き続け、労働者をはじめ、モロッコの人々、祭りや民俗芸能、人の業を背負った浄瑠璃人形や破損仏など多様な対象に取り組んでいます。

このたびの収蔵品展では作品約50点を厳選し、各人が探求してきた初期から近年に至る道のりを時代を追ってとどめます。幽玄で華麗な平川の樹々や山水、骨太で力強い大森の人間群像、それぞれの魅力をお楽しみください。

プレゼントのお知らせ

ご来場の方に本展のパンフレットを差し上げます。数に限りがありますのでお早めにお越しください。

■美術講座「平川敏夫と大森運夫」 3月4日(日)午後2時～ 講師＝当館学芸員

■ボランティアガイド 2月14日より毎日(3月4日をのぞく)午後1時半～午後2時半～

ホキ美術館を訪れて 秋の研修旅行レポート

水谷好克(747)

一度は行ってみたいと思っていた念願のホキ美術館を訪れることができ、かつ野田弘志さん直々のギャラリートークを聴くことができ、大変充実した思いを味わった。そうして痛切に感じたことがある。それは、比べる、ということのおそろしさである。

東京の画廊の専務からこんなことを聞いたことがある。たとえば3人展を催すとする。そうすると画廊を出ていく時、お客さんは、必ず誰が一番、次は誰、と順位をつけていられるものだ、ということ。画家はそれぞれに全力で描いている。しかし観るほうはいともあっさりと、これはいい、これはちょっと、と順位をつけてしまうものだということである。

ホキ美術館は細密に描かれた写実の絵の美術館で、写実の絵同士を比較する、という日常あまりない体験ができる。対象を自在にそっくりに写し取ることができる、ということとはもはや当たり前、という前提で、さらにその先を求めることになるわけだから要求水準がたいそう高くなる。こんなわざわざ絵で表現しなくたって写真に任せておけばよいではないか、という絵がある。突っ込みが足りない、と思われる絵がある。なんでこんな大きさに描かねばならないのかという絵がある。叙情に流されているなどと思われる絵がある。並ぶほどにうすっぺらく見える絵がある。着せ替え人形のように見える絵がある。それ一点を見れば絵として成立しているのだろうが、こう細密に描かれた絵の中に混じると、写実の絵と見えない絵がある。明らかに物真似と思われる絵がある。品、というものが感ぜられない絵がある。

野田弘志さんは、自分の絵は記号ではない、ものそのものだ、ということを言われる。そのことがとてもよくわかる。少なくとも、その狙いがよくわかる。存在の凄み、ということ、それは、狙わなければ画面にあらわれるはずもないのだということが、「比べる」ことによってよくわかる。ずどーんとそこにあるということ、写実ということは「実」を「写」す、ことなのだから、狙いは存在の凄みを二



次元に再現することにあるはずだろう。しかしそういうものを初めから目標にはしていない絵が多すぎると思われた。そういう絵はそういう絵で需要のあることではあろう、しかし写実の本流とは思われない。自分としてはまん真ん中直球、という絵を観たいのだが、案外にそういう絵、少なくともそれを狙いとした絵は少ないのだな、ということも思った。

ホキ美術館の野田さんのコーナーの照明はあまりよろしくない。有珠山を描いた、あれは400号ほどにもなるかという巨大な絵は、斜め上からの明かりが画面上部に三重の影をもたらししている。あれは鑑賞の妨げだろう。照明はもっと、絵の正面からほしい。しかしそうではあるのだが、あの斜め上からの光線が、あの絵の表面の絵の具の凹凸のありようを見せて、重厚さを際立たせている、ということも思った。画面のどこを切り取っても均質な密度をもった絵を描きたい、という野田さんの姿勢がよく見える。あの絵のキャンバスが張られていくところから、完成して展覧会に出品されたところ、それを東京、大阪、北海道で自分は観てきた。しかしあのごつごつしたような画肌には気づかなかった。有珠山、その背後の空、そうしていわば地球そのものを描き取ろう、という野田さんの意志が、はからずもよく見ることもできた、と思ったことだった。

友の会ホームページをリニューアルしました！

[豊橋市美術博物館友の会](#)

もうごらんになりましたか？新しい友の会のホームページ。イベントの最新情報、研修旅行の感想、アンケートの結果、会報のバックナンバー、会員の声など紹介しています。ぜひ、のぞいてみてください。また、お気軽にみなさんの「声」もお寄せください。

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 豊橋市美術博物館友の会事務局

収蔵品紹介

[ホッチャレ]

野田弘志 ●NODA.Hiroshi

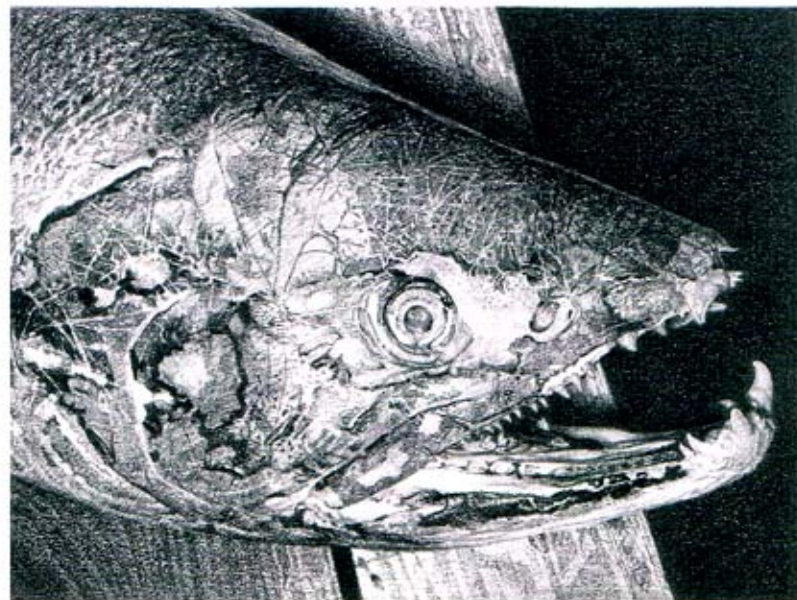
1983年 紙、鉛筆 7.9cm×10.5cm

昨年11月開館のホキ美術館での作品展示、日曜美術館での特集の記憶も新しい。中学・高校と多感な時代を豊橋に学んだ野田は、「写真の系譜」を収集方針の一つに掲げる当館にとって二重の意味で重要な作家であり、「風伯」においても何度も取り上げられている。

本作は、『湿原』の挿画として描かれた鉛筆画。1983年から'85年にかけて朝日新聞朝刊に連載された小説のために、野田は628点ものデッサンを残した。当時を記した文章を読むと、挿絵と小説は一方が他方に従属するものではなく、例え独立した形態でも味わうことのできるものとなるような対等な関係を意図していることが随所に表れる。連載小説から随分と時間を経過した今、それぞれが別の使命を持つ時が来ているのかも知れない。私自身、それぞれの形態で味わった人間である。

ワインラベル、やどかり、アヒル……。様々なモチーフが選ばれる中、とりわけ目を引くのが《ホッチャレ》。耳慣れないこの単語は、画面一杯に描かれた傷だらけの鮭を指す。故郷の川に帰り、急流を上り産卵する雌を守る雄の姿を真正面から捉えている。やがて次世代の生命が誕生し、種のサイクルは続いていく。絶命そしてまた、新たな生命の始まりでもある。

「墨に五彩あり」とは水墨画を形容する表現である。し



かしながら、鉛筆のみで緊迫した世界を創り出す画家に、この言葉を思わざるを得ない。

(豊橋市美術博物館学芸員 細田樹里)

◎収蔵品による「野田弘志展」

会期／開催中～12/28、1/21～2/5

会場／2階 シンボルコーナー、第3・4展示室

油彩画17点と小説『湿原』の挿画18点のあわせて35点を一堂に紹介しています。

※年末年始は館内工事のため12/29～1/9まで休館です。

編集後記

大震災でなく原発事故のゆえに来日をキャンセルした音楽家は多い。国内の報道と欧米の報道は違うようだ。あるべきはずのものが無くなり、いるべきはずの人が存在せず、待ち望んだ心の揺れが得られなかったとき、一体何を思えばいいのだろうか。

日々の暮らしは平穏無事でありたい。しかし心は刺激を求めている。心楽しいこと、心が満たされること、心が時めくことで生きている実感を味わう。

時代はアートを求めているのか、アートに何を求めるのか、アートにその力はあるのか、今はいかなる時代か。

一緒に答を見いだして行きましょう。

増田洋美さんの作品を「現代美術展inとよはし」(平成24年1月17日～2月19日・豊橋駅前周辺&豊橋市美術博物館周辺)で観て下さい。(鈴木伊能勢)

【表紙作品】

大森運夫 1917-

《冬の夜神楽》(部分) 1974年(昭和49) 169.4cm×369.2cm

豊橋市美術博物館蔵

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第81号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 神野能生子 福島陽子 鈴木冷子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成23年12月20日発行